

メロンのハウス栽培におけるミツバチの放飼について (第1報)

辻川義寿・\*吉武貞敏・\*大場支征・\*\*中村 武・\*\*杉 和博  
 (福岡県種畜場 \*福岡県立園芸試験場 \*\*福岡県朝倉農業改良普及所)

TSUZIKAWA, Y., YOSITAKE, S., OBA, A.,  
 NAKAMURA, A. and SUGI, K.

On feed and management of honeybee in the green house Cultivation of Melon (1).

メロンのハウス内放飼におけるミツバチの適正な飼養管理技術ならびに、着果効果を検討中であるが、蜜源植物の開花が始まる季節において、ハウス内両渠門群を放飼し、若干の知見を得たのでその概要を報告する。

試験方法

ミツバチは欧州種イタリアン。メロンはコザック2号を用い、4月7日から13日間放飼し現地(朝倉郡夜須町)で実施した。

試験構成

		放飼条件	群数	交配区分	棟数
試験区	A	ハウス内渠箱渠門	1	ミツバチの	1
	B	" 内外 "	1	自然訪花	1
対照区	C	" 外 "	2	人工授粉	1

注) 蜂量1群約1万頭, 1棟面積約270m<sup>2</sup>

試験結果および考察

1. 産卵育子圏の消長を試験終了時/開始時比でみると、C区、B区は約2倍以上に増加しているが、A区はわずか0.1と生育が止まり、放飼経過とともに新陳代謝が進まず、訪花活動に影響するものと考えられる。

2. 晴天日のハウス内飛しょう状況、両区とも活発で充分な訪花がみられた。雨天日はわずかに出巢するものの天井付近を飛廻るだけで訪花は認めなかった。これは花房に水滴があり糖液および花粉の収集ができないためと考えられた。しかし、10分間程度暖房を入れたことにより、訪花が始まった。

3. 着果成績 表1のとおり第1回の調査においてC

区に比しA区およびB区は約2倍の着果を示した。第2回調査ではB区が他の区よりやや良好であった。しかし、各区とも期待着果数はみられなかった、これは放飼後半の天候不順に基因するものと考えられる。

表1 着果成績

	開花数・株当	1回着果数・株当	2回着果数・株当
A	174(100) 5.8	116(67%) 3.9	37(21%) 1.2
B	211(100) 4.2	155(73) 3.1	70(33) 1.4
C	221(100) 4.4	82(37) 1.6	59(27) 1.2

注) A区10株×3個所, B・C区10株×5個所

4. 果の形質、交配区別10個平均重、ネットの発現、花落の形状に両者の違いはみられない。玉ぞろいはミツバチ区が良かった。1果当り種子数は人工授粉区が8%ほど多い。肉厚についてはミツバチ区が7%ほど厚かった。糖度はミツバチ区15.18%、人工授粉区13.29%でやや熟期の若い後者が低かった。

要約

ミツバチのハウス内放飼は気温の上昇によって消耗を大きくするため、蜜源植物の開花する時期に併行して、ハウス内外渠箱渠門(両渠門開放)の群勢および着果安定について検討した。

両渠門群は繁殖が順調に進み、採蜜も可能であった。なお、着果および品質などについても差がなく、授粉作業の省力化が期待されるものと考えられる。

参考文献

- 1) 川崎重治他(1972): 九農研, 34: 171-172.
- 2) 川崎重治他(1973): 九農研, 35: 187.